

教育史学会

第54回大会 2010年10月9日(土)～10日(日)

プログラム

早稲田大学

教育史学会

第 54 回大会

2010 年 10 月 9 日（土）～ 10 日（日）

プログラム

早稲田大学

教育史学会第 54 回大会 参加のご案内

大会参加費、懇親会費について

第 54 回大会では、院生会員（臨時学生会員を含む）の大会参加費を無料とします。確認のため学生証をお持ちください。

また、大会参加費と懇親会費について、前納方式を採用します。大会当日の受け付けをスムーズに行うためにも、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

① 大会参加費、懇親会費

	前納（8月31日まで）		当日	
	一般会員	院生会員	一般会員、臨時会員	院生会員、臨時学生会員
大会参加費	3,000 円	—	3,500 円	—
懇親会費	4,000 円	3,500 円	4,500 円	3,500 円

② 振込先

ゆうちょ銀行 口座名称：教育史学会第 54 回大会準備委員会、口座番号：00160-8-429619

※「教育史学会第 54 回大会 開催のご案内」（5 月末に学会事務局から送付済み）と一緒に送付した郵便振込用紙をご利用ください。紛失された方は、郵便局に備え付けの用紙をお使いください。

③ 振込期限 2010 年 8 月 31 日（火）（期日厳守）

※振込手数料はご本人の負担になります。

※お振込みいただいた大会参加費、懇親会費のキャンセルは、2010 年 8 月 31 日（火）までに準備委員会事務局へファックスか E メールでご連絡いただいた場合に限り、受け付けます。返金する際の振込手数料は、ご本人の負担とさせていただきますので、お振り込みいただいた金額から、手数料を差し引いた額を返金いたします（返金ご希望の際は口座番号をお知らせください）。

受付

大会参加の受付は、9 日（土）は 16 号館 7 階で、10 日（日）は 14 号館 4 階のロビーで 8 時 15 分から行います。第 1 日と第 2 日では会場が異なります。

〈参加費を前納された方〉

受付へ「払込受領証」（ご利用明細）をご持参ください。確認後、『発表要綱集録』と名札（記入済）等をお渡しします。

〈当日お支払いされる方〉

受付で大会参加費（一般会員・臨時会員…3,500 円）をお支払いください。『発表要綱集録』と名札（未記入）等をお渡しいたしますので、大会会場へ行かれる前に名札にご所属とお名前の記入をお願いいたします。懇親会への参加も受け付けます。

学会年会費の納入は、学会事務局の受付で行います。

国際シンポジウム（公開）

今回のシンポジウムは理事会の国際交流委員会によって企画され、テーマは「東アジアにおける教育の近代化とは何か」です。公開シンポジウムですので、会員以外の方も参加できます。会場は、井深大記念ホールです。詳細は、本プログラム 8・9 ページをご参照ください。

研究発表・コロキウム

- ① 研究発表時間は、一人あたり 30 分（研究発表 25 分、質疑 5 分）です。
- ② 発表内容は未発表の研究に限ります。
- ③ 発表者が欠席の場合、発表時間の繰り上げは行いません。また、発表者が遅刻の場合は、発表資格を失います。ご注意ください。
- ④ 発表に関わるレジュメ、資料などを会場で配布される場合、十分な部数をご用意ください。大会準備委員会では、印刷・増刷に応じられません。
- ⑤ 本大会では、コロキウムのいっそうの充実を図るため、正規の時間帯に組み込み、時間も長めに確保してあります。ふるってご参加ください。

懇親会

10月9日（土）のシンポジウム終了後、18時30分より大隈会館N棟3階で懇親会を開催いたします。懇親会費は、前ページの「大会参加費、懇親会費について」をご参照ください。多数の皆様のご参加をお待ちしています。会場の大隈会館の場所については、本プログラム 5 ページをご参照ください。

昼食

10月9日（土）は大学食堂（カフェテリア）を利用できますが、10日（日）は利用できませんのでご了承ください。昼食につきましては、大会当日受付でキャンパス周辺の飲食店、コンビニエンス・ストア等のマップを配布いたしますので、ご参照ください。

会場までのアクセス

- ① 早稲田大学（早稲田キャンパス）までのアクセスは、本プログラム 5 ページをご参照ください。
- ② 駐車場の用意はありませんので、公共の交通機関をご利用ください。

宿泊

宿泊につきましては、各自での手配をお願いいたします。大会準備委員会による斡旋は行いませんのでご了承ください。

問い合わせ先

教育史学会 第 54 回大会準備委員会 事務局

担当：大岡紀理子（早稲田大学教育学部教育学専修助手）

〒 169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1 早稲田大学教育学部 湯川研究室

Tel：03-5286-1488 FAX：03-5286-1543

E-mail：jshse54_waseda@yahoo.co.jp

大会ホームページ：http://www.waseda.jp/assoc-jseh54/

タイムスケジュール

	10月9日(土) 第1日	10月10日(日) 第2日	
8:15	受付 (16号館7階 703教室)	受付 (14号館4階 ロビー)	8:15
9:00	研究発表 (16号館7階 701、702、704、705)	研究発表 (14号館4階 401、402、403 5階 501、502)	9:00
12:00	昼休み	昼休み	11:30
13:00	総会 (井深大記念ホール)	研究発表 (14号館4階 401、402 5階 501、502)	12:30
14:00	国際シンポジウム(公開) (井深大記念ホール)	移動	15:00
		コロキウム (14号館4階 401、402、403 5階 501、502)	15:10
18:00	移動		17:30
18:30	懇親会 (大隈会館 N棟3階)		
20:30			

※第1日と第2日では会場が異なります。

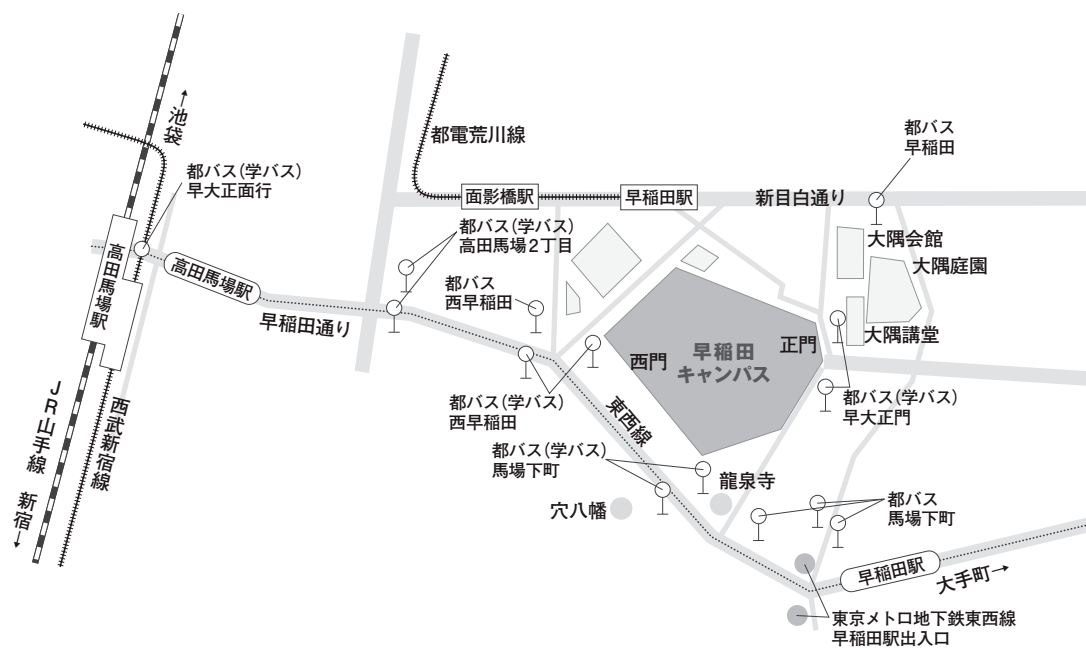
※この他、10月8日(金)には、理事会、機関紙編集委員会、書評委員会が予定されています。

教育史学会 第54回大会準備委員会 準備委員

委員長：湯川次義

委員(50音順)：坂内夏子、佐藤隆之、新保(小林)敦子、大岡紀理子(助手)

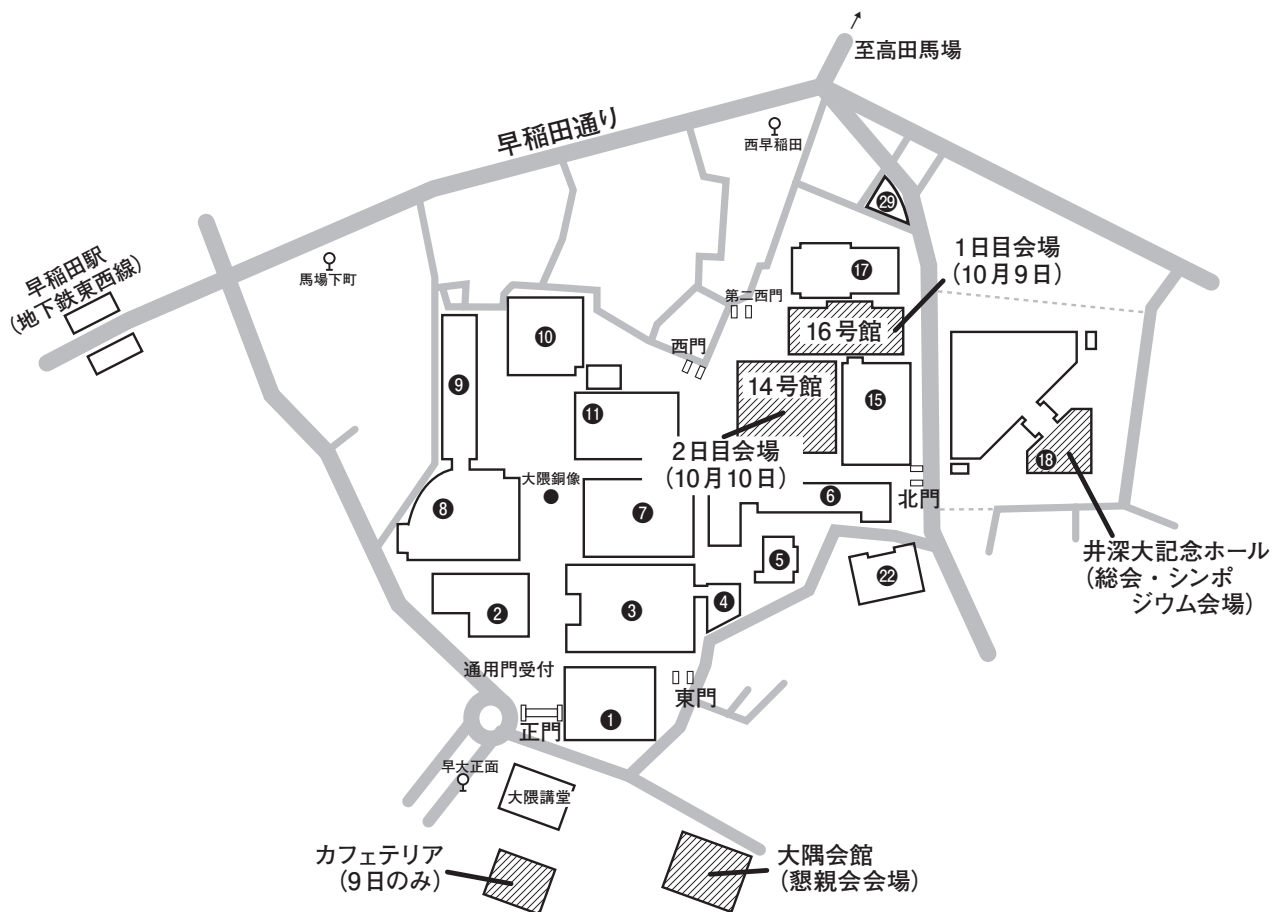
交通案内図



【交通】

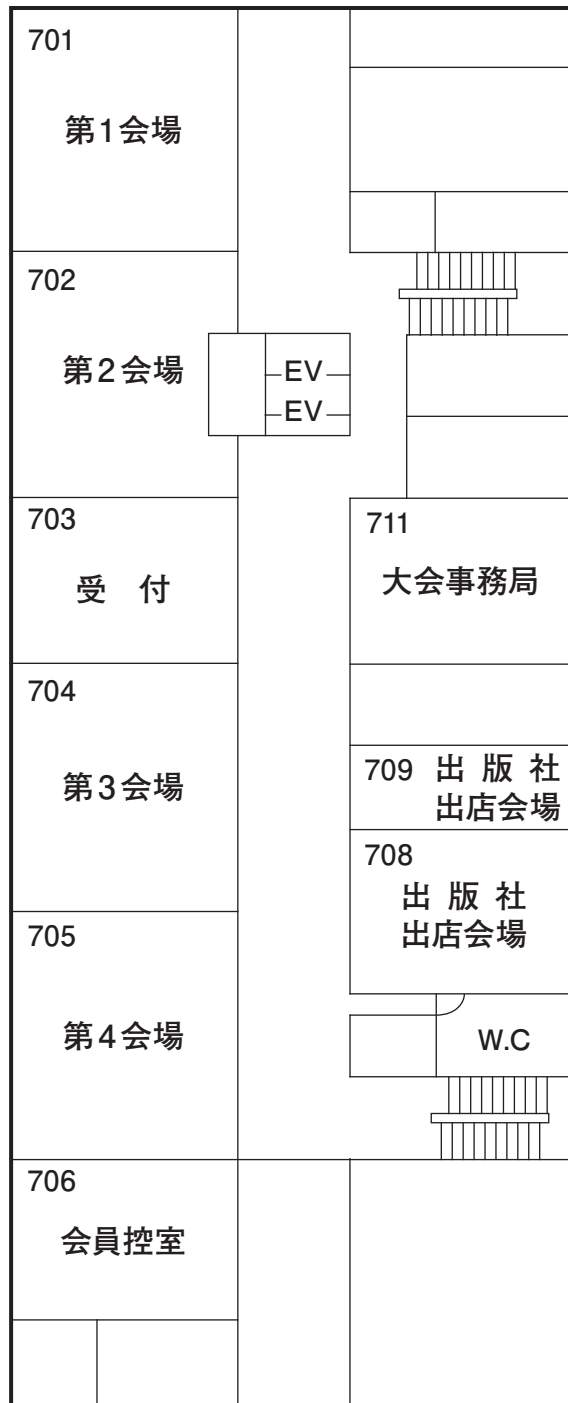
- ・JR 山手線・西武新宿線：高田馬場駅（徒歩 20 分）都・学バス（高田馬場駅～早大正門）
- ・地下鉄東京メトロ 東西線：早稲田駅（徒歩 5 分）、副都心線西早稲田駅（徒歩 17 分）
- ・バ ス：新宿駅西口～早稲田、渋谷駅～早大正門、上野広小路～早稲田
- ・都電荒川線：早稲田駅（徒歩 5 分）

構内案内図



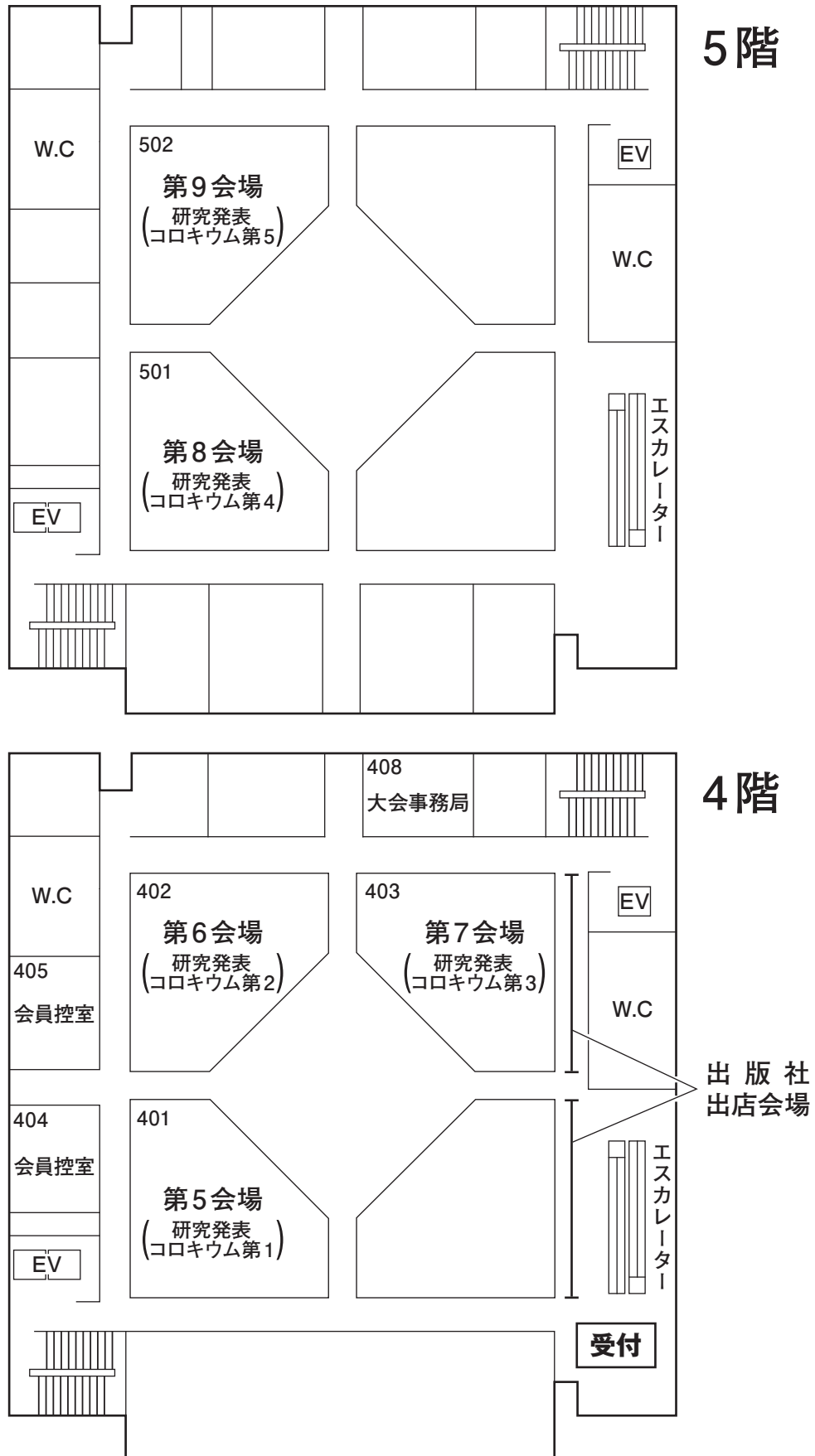
会場案内図（第1日）

16号館7階



会場案内図 (第2日)

14号館 4階・5階



国際シンポジウム（公開）

第54回大会のシンポジウムは、理事会の国際交流委員会の企画により下記の要領で行います。

◎テーマ 東アジアにおける教育の近代化とは何か

日 時：2010年10月9日（土）14：00～18：00

場 所：早稲田大学井深大記念ホール（国際会議場）

報 告 者 荒井 明夫（日本・大東文化大学）
 楮 宏啓（中華人民共和国・北京師範大学）
 金 京美（大韓民国・独立記念館）
指定討論者 大塚 豊（広島大学）
司 会 者 沖田 行司（同志社大学）
 佐野 通夫（こども教育宝仙大学）

《趣 旨》

教育は個人の発達とともに、社会発展に大きな役割を果たし、その普及はいまや高等教育に及んでいる。近代化には教育の拡大が欠かせないが、教育システムそのものも近代化を遂げてきた。学校や教師など教育システムは、前近代社会に起源を持つが、市民革命・産業革命を通じた近代国民国家の確立過程において、初等教育から中等教育をカバーし、労働市場や資格制度などのサブシステムと連結した公教育システムとして変容を遂げてきた。ここでいう「教育の近代化」とは多義的な内容を含むが、世俗化、義務化、無償化、平等な教育機会など近代社会の理念に対応し、身分制や血縁原理を脱却して業績原理を採用することなどがあげられよう。

国民国家の教育システムの枠内で展開してきた教育の近代化は、新たな課題にぶつかっている。グローバル化により人間・資本・商品の移動が促進され、教育の分野においても、国民国家の枠を越えた共通化や標準化が進んでいる。たとえば、高等教育における学生の移動は、ボローニア・プロセスに示されるように、教育段階や学位の標準化、学習内容の明確化などをもたらしている。また、このプロセスを通じて、英語による教育も広がっている。このことは、各国の文化的伝統や社会構造と対応した教育システムとの間で葛藤をももたらしている。

そもそも、アジア諸国における教育の近代化は、欧米諸国のアジア進出という政治的・軍事的圧力のもとで否応なく開始された。各国・地域において内発的に発展してきた教育と外圧による教育のシステム化はしばしば対立的な関係におかれたのである。植民地化された国においては、宗主国の教育システムが強制的に導入された。いち早く国民国家を形成した日本は、欧米モデルによる教育の近代化を進め、日本的に変容し、さらに韓国・台湾などアジアの植民地に扶植しようとした。アジアにおける教育の近代化とは、欧米モデルの教育システムを受容であり、その土着化でもあった。皮肉に言えば、近代化とは、欧米化を正当化する言説でもあったとも言える。

グローバル化の一環として生じている教育システムの再編は、第2次近代化とでもいうべきものであるが、そこでは、高等教育を中心に、アングロ・サクソン諸国の教育モデルが波及させられようとしている。歴史的視角から、改めて問題になるのは、アジア諸国が構築して来た教育システムにおいて、何を教育の近代化と捉えてきたのか、その理念は何か、欧米モデルの導入と内発的発展との関係はどのようなものであったのか、近代化はどこまで達成されてきたのか、その結果は今後どのように影響していくのかという点である。

今回のシンポジウムは、これまで日本・韓国・中国の教育関係学会で行われてきた研究交流の成果もふまえ、教育の近代化を中心テーマとして開催する。

※当日は3か国語の同時通訳を行います。

<報告者プロフィール>

○荒井 明夫（あらい あきお）

大東文化大学教授。専門分野は近代日本中等教育史・地域教育史。著書に『明治国家と地域教育—府県管理中学校の研究—』（吉川弘文館・近刊）、編著に『近代日本黎明期における「就学告諭」の研究』（東信堂、2008年）、論文に「近代日本公教育成立過程における国家と地域の公共性に関する一考察」（『教育学研究』第72巻第4号、2005年）など。

○楮 宏啓（ちょ こうけい）

北京師範大学教育管理學院教授、同博士課程指導教授、國務院政府特殊手当専門家。専門分野は教育発展戦略、教育政策と法律、教育管理、外国教育史など。著書に『教育近現代化の道筋』（教育科学出版社、2000年）、『中世を後にして—ルネサンス時代の教育心性』（北京師範大学出版社、2000年）、『デューイの教育思想引論』（湖南教育出版社、1998年）など。

○金 京美（きむ きよみ）

独立記念館教育文化部長。専門分野は韓国近代教育史。著書に『韓国近代教育の形成』（2009年）、『1940年代朝鮮の「国史」教科書と日本の国史教科書』（2006年）、共著に『植民地ファシズムの遺産と克服の課題』（2006年）など。

<指定討論者プロフィール>

○大塚 豊（おおつか ゆたか）

広島大学大学院教育学研究科教授。専門分野は比較教育学、中国教育史。著書に『中国大学入試研究—変貌する国家の人材選抜—』（東信堂、2007年）、『現代中国高等教育の成立』（玉川大学出版部、1996年）、共著に『中国の近代化と教育』（明治図書出版、1983年）など。

研究発表

第 1 日

10月9日(土) 午前の部(9:00～12:00)

第1会場 16-701教室

司会: 関山邦宏(和洋女子大学) 佐藤 環(常盤大学)

- [1] 9:00 近世藩儒をめぐる「知」のネットワークと社会的機能
— 一日出藩帆足万里を対象に—
測上皓一郎(京都大学・院)
- [2] 9:30 近代学校と寺子屋
— 文字教育を中心に—
島村直己(国立国語研究所)
- [3] 10:00 品川県五番組と太子堂郷学所開校
菅田明子(法政大学・院)
- [4] 10:30 大学区教育会議の研究
— 第四大学区教育会議の検討を中心に—
湯川嘉津美(上智大学)
- [5] 11:00 開拓使の教育政策の転換
— 1874年学務局・学務係設置を支点として—
井上高聡(北海道大学大学文書館)
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

第2会場 16-702教室

司会: 菅原亮芳(高崎商科大学) 佐々木尚毅(群馬県立女子大学)

- [6] 9:00 漢学者養成機関創設の理念と「皇学」観
— 大東文化学院創設期における学科課程の分析を中心として—
浅沼薫奈(大東文化大学)
- [7] 9:30 少年教護法(昭和8年法律55号)成立過程の研究
二井仁美(大阪教育大学)
- [8] 10:00 教育科学研究会の教育制度改革運動
— 鈴木舜一の「研究調査」を中心に—
金 智恩(お茶の水女子大学・院)
- [9] 10:30 沖縄方言論争前後の標準語教育論
— 『沖縄教育』誌上の沖縄人教師の議論に着目して—
照屋信治(京都大学・院)
- [10] 11:00 1940年代前半における教育雑誌統制策
— 国民教育図書株式会社・国民教育研究所に注目して—
小林優太(名古屋大学・院)
- 〈総合討論〉 11:30～12:00

研究発表

第3会場 16－704教室

司会 尾上雅信（岡山大学） 河合 務（鳥取大学）

- [11] 9：30 形成期パリ大学の組織化をめぐって
—十三世紀、神学部の対托鉢修道会闘争の中で—
松浦正博（広島女学院大学）
- [12] 10：00 フランス第三共和政期前半における女子中等教育と「家庭教育」
—週刊誌『ル・プチ・エコー・ド・ラ・モード』の分析を中心に—
井岡瑞日（京都大学・院）
- [13] 10：30 デュルケム道德教育論の成り立ち
—〈意志の自律性〉に注目して—
水谷友香（京都大学・研究生）
- 〈総合討論〉 11：00～12：00

第4会場 16－705教室

司会 日暮トモ子（有明教育芸術短期大学） 木山徹哉（九州女子短期大学）

- [14] 9：00 歌括体通史教科書の形成
—唐後期より明初に至る動向—
鈴木正弘（埼玉県立所沢西高等学校）
- [15] 9：30 蔡元培大学論形成の連続性と断絶性
白 梅紅（埼玉大学・研究生）
- [16] 10：00 台湾領有初期における学校設置政策の展開
—国語伝習所分教場の設立過程に着目して—
山本和行（天理大学）
- [17] 10：30 日本統治末期朝鮮における国民学校教員と「皇国臣民」化
有松しづよ（九州大学・院）
- [18] 11：00 近代中国人留学生の「対日認識」の形成と変容
—戴季陶を中心に—
朱 虹（同志社大学・院）
- 〈総合討論〉 11：30～12：00

研究発表

第2日 午前の部

10月10日（日）（9：00～11：30）

第5会場 14－401教室

司会 坂本紀子（北海道教育大学函館校） 小宮山道夫（広島大学）

- [19] 9：00 明治初年代における「教育」のメディアの地域的展開
塩原佳典（京都大学・院）（日本学術振興会特別研究員）
- [20] 9：30 教育令制定過程の再検討
湯川文彦（東京大学・院）
- [21] 10：00 明治前期の「久徴館」と旧加賀藩出身学生
—『久徴館同窓会雑誌』の分析から—
井上好人（金沢星稜大学）
- [22] 10：30 福井県松平康荘の農業留学
—明治期華族子弟教育の一形態—
熊澤恵里子（東京農業大学）
- 〈総合討論〉 11：00～11：30

第6会場 14－402教室

司会 井上恵美子（フェリス女学院大学） 田代美江子（埼玉大学）

- [23] 9：00 『婦女鑑』の下賜と普及
越後純子（お茶の水女子大学・院）
- [24] 9：30 明治中期以降における高等女学校の国語教科書にみる「良妻賢母」教育
姜 華（早稲田大学・院）
- [25] 10：00 近代日本における女子専門学校の特質に関する一考察
—教育理念と専門分野を中心に—
ママトクロヴァ ニルファル（早稲田大学・院）
- [26] 10：30 戦前期女子ミッション・スクールにおける婦人宣教師の作法に対する教育観
—神戸女学院宣教師 C.B. デフォレストを中心として—
小野加奈子（神戸女学院大学・院）
- 〈総合討論〉 11：00～11：30

研究発表

第7会場 14－403教室

司会 清水康幸（青山学院女子短期大学） 野口穂高（玉川大学）

- [27] 9：00 近代日本における公園計画の展開と学校園概念の変遷
田中千賀子（武蔵野美術大学・院）
- [28] 9：30 大正期の高等教育機関の拡充計画の背景と特質
林 一夫（文部科学省）
- [29] 10：00 造船分野の海軍技手の教育的背景とキャリア
谷口雄治（職業能力開発総合大学校）
- [30] 10：30 杉崎瑠研究
木下いずみ（川崎市立下小田中小学校）
- 〈総合討論〉 11：00～11：30

第8会場 14－501教室

司会 吉川卓治（名古屋大学） 渡辺典子（武蔵野美術大学・非）

- [31] 9：00 占領期京都市における朝鮮人学校政策の展開
—行政当局と朝鮮人団体の交渉に着目して—
松下佳弘（京都大学教育学研究科・聴講生）
- [32] 9：30 創設期の静岡大学の教員養成における一般教養の位置づけ
山崎奈々絵（お茶の水女子大学・院）
- [33] 10：00 日本における学校福祉行政施策の展開に関する歴史的研究（1）
—「長欠児童生徒援護会」の設立と学校福祉実践の組織化をめぐる—
大崎広行（目白大学）
- [34] 10：30 戦後夜間中学校の研究
—東京都夜間中学校日本語学級の開設に着目して—
大多和雅絵（横浜市公立学校事務職員）
- 〈総合討論〉 11：00～11：30

研究発表

第9会場 14－502教室

司会 山名 淳（京都大学） 佐藤哲也（兵庫教育大学）

- [35] 9：00 17世紀北米オランダ植民地における女子に対する教育観
昆 光枝（東北大学・院）
- [36] 9：30 1920年代から1930年代のドイツにおける政治と人間形成論
—総合雑誌 *Deutsche Rundschau* の分析—
清水禎文（東北大学）
- [37] 10：00 近年のマカーレンコ理論の再評価が意味するもの
桑原 清（北海道教育大学札幌校）
- 〈総合討論〉 10：30～11：30

研究発表

第2日 午後の部

10月10日（日）（12：30～15：00）

第5会場 14－401教室

司会 笠間賢二（宮城教育大学） 久保田英助（早稲田大学・非）

- [38] 12：30 修身科教育におけるイソップ寓話
—明治期教科書を資料に—
坂本麻裕子（名古屋大学・院）
- [39] 13：00 日露戦後における上田万年の国語思想
アリポヴァ カモラ（京都大学・院）
- [40] 13：30 井上哲次郎の国民教育観
—国定教科書編纂への関わりを中心に—
瓜谷直樹（同志社大学・院）
- [41] 14：00 明治・大正期日本における教育学の体系化過程に関する一考察
鈴木 篤（兵庫教育大学）
- 〈総合討論〉 14：30～15：00

第6会場 14－402教室

司会 堀池真一（元東京都教育庁） 菱田隆昭（こども教育宝仙大学）

- [42] 12：30 青年論における〈人格〉の登場
和崎光太郎（京都大学・院）（日本学術振興会特別研究員）
- [43] 13：00 1920年代の社会教育思想における「国家」認識についての研究
—民間の思想家の分析を中心に—
大谷 俊（早稲田大学・院）
- [44] 13：30 百貨店における教育
—店員訓練の近代化とその影響—
江口 潔（芝浦工業大学）
- [45] 14：00 成人教育婦人講座における女子教育観
—奈良女子高等師範学校の実践に注目して—
森岡伸枝（奈良女子大学・非）
- 〈総合討論〉 14：30～15：00

研究発表

第8会場 14－501教室

司会 近藤健一郎（北海道大学） 米田俊彦（お茶の水女子大学）

- [46] 12：30 憲法改正過程における教育条項の修正
—義務教育の範囲と青年学校改革案との関係を中心として—
大島 宏（東海大学）
- [47] 13：00 戦後教育改革思想に関する研究
—南原繁と務台理作との関連性に着目して—
金井 徹（修紅短期大学）
- [48] 13：30 琉球政府における教育基本法案にみる「教育権の独立」に関する一考察
梅本大介（早稲田大学・院）
- [49] 14：00 短期大学の史的展開に関する一考察
木田竜太郎（早稲田大学・院）
- 〈総合討論〉 14：30～15：00

第9会場 14－502教室

司会 小野雅章（日本大学） 高田文子（白梅学園短期大学）

- [50] 12：30 道徳教育史の時期区分とその年表
大庭茂美（九州女子短期大学）
- [51] 13：00 潜伏と忍耐、そしてケガレ
—変形セーラー服を手がかりとして、
浦上キリシタン史（1638－1966）の特徴を考える—
岡本洋之（兵庫大学）
- [52] 13：30 日本のBBS運動の展開：機関誌『ともだち』の分析を中心に
渡辺かよ子（愛知淑徳大学）
- [53] 14：00 戦後日本における幼稚園・保育所の普及と地域差の実態
—石川県を事例として—
松島のり子（お茶の水女子大学・院）
- 〈総合討論〉 14：30～15：00

コロキウム

第 2 日

10 月 10 日（日） 15:10 ～ 17:30

コロキウム第 1 第 5 会場 14 - 401 教室

新教育運動における学校空間構成の改革

オルガナイザー 渡邊隆信（兵庫教育大学）

報 告 者 宮本健市郎（関西学院大学）
山崎洋子（武庫川女子大学）
山名 淳（京都大学）
渡邊隆信（兵庫教育大学）

画一的で閉鎖的な学校空間を改革しようとする試みは、19 世紀末から 20 世紀初頭に展開した新教育運動に一つの歴史的起源を求めることができる。そこでは学校空間の改革が、単に建築上の問題にとどまらず、学校における時間割や学習内容・方法の変革、さらには個と集団の関係の編み直しなど、教育の他の次元と密接に関連しながら展開した。

本コロキウムでは、新教育の学校空間研究の問題視角について論じたうえで、アメリカ、イギリス、ドイツにおける新教育の具体的実践を取り上げながら、各国における校舎、教室、校庭等の改革の実態と特質について考察する。その作業を通して、新しい学校の空間構成が、新教育で重視された子どもの自発性、創造性、協働性といった理念をどのようなかたちで反映させていたのか、また、それが時間、学習、人間関係といった教育の他の次元とどのように連動していたのかについても検討したい。

コロキウム

10月10日(日) 15:10～17:30

コロキウム第2 第6会場 14-402教室

1930～40年代日本における教育団体の変容と再編過程(2) — 戦時期 内地・外地における教育団体の具体相 —

オルガナイザー 梶山雅史(岐阜女子大学)

報告者 新谷恭明(九州大学):1940年代前半、福岡県教育会の活動実態
渡部宗助(埼玉工業大学):植民地等における教育諸団体・教育会の再編と崩壊

〈設定趣旨〉

戦前最大の教育団体・組織であった教育会が、昭和の戦時期にどのように戦争に組み込まれ、どのように機能したか、そして戦中から戦後への時代の転換、戦後の立ち上げにむけて、いかなる対応が現れたか。戦前の教育団体の最終段階の実像・実態、そして戦後教育発足の過渡期における教育団体の新たな組織論の登場と現実的展開、その歴史的経緯・歴史像の詳細について、研究の深化・進展を図りたい。

前年度に続き、本年度は、昭和の戦時期 内地、外地における教育団体の具体相について福岡県と植民地における教育団体にスポットをあて論議を交わしたい。

○新谷報告

1940年代前半は日本が太平洋戦争に突入し、戦況が深刻になっていく時期である。内地の事例分析として、福岡県教育会の活動実態に照明をあてる。

機関誌『福岡県教育』の編集方針、掲載記事、戦時教育情報の変化を分析し、「錬成」を課題とする「九州沖縄八県聯合教育会教育研究会」設定、満州視察団派遣、満蒙開拓幹部訓練所への教員派遣、国民学校教育振興諸事業の策定、軍用機の献納等々、戦況の深刻化に伴い、福岡県教育会の果たした教育情報回路としての機能を検討し、戦時動員の実相を考察したい。

○渡部報告

外地の事例分析として、植民地等における教育諸団体・教育会の再編と崩壊過程に照明をあてる。府県教育会が大日本教育会という単一団体の各支部に再編された頃(1944.4)、日本植民地等における教育会に代表される教育諸団体はどのような状態にあったか。

1943年4月に「内地」に編入された樺太(サハリン)はもとより、朝鮮、台湾では義務教育制と徴兵制の施行という「二大事業」を控えていた。台湾教育会の「台湾教育」は、「文教」に再編・改称してその事業を縮小した(1944.3)。朝鮮教育会の「文教の朝鮮」の確認は1944年11月までである。満洲の南満州教育会は在満日本教育会に改称・改組し、「南満教育」は「会報」に替え(1938)、満洲帝国教育会の方は新たに「建国教育」を発刊し(1939)、1944年8月までは発行した。

これらの教育諸団体のその後の崩壊過程は、どこまで追跡可能か、その意義を考えたい。

コロキウム

10月10日(日) 15:10～17:30

コロキウム第3 第7会場 14-403教室

《三角測量》による比較教育史の試み — 沖縄・ヨルダン・ブルターニュ —

オルガナイザー・報告者 越水雄二 (同志社大学) 趣旨説明・ブルターニュ報告
報告者 長谷川精一 (相愛大学) 沖縄報告
*ゲスト報告者 北澤義之 (京都産業大学) ヨルダン報告

〈設定趣旨〉

《三角測量》とは、文化人類学者の川田順造氏が提唱している研究方法である。さまざまな学問領域で従来盛んな「東西」比較に、「南」の参照項も加えて三つの視点から問題を捉えるならば、研究者がもつ偏向をより是正しつつ、西洋近代を相対化する考察が期待できるだろう。本コロキウムは、そうしたアイデアも参考にして、比較教育史の新たな方向性を探ってきた。3回目となる今回は、日本とフランスの近代教育史を、言語(標準語)教育をめぐる実践と思想に焦点を当て、沖縄およびブルターニュという地域からそれぞれ捉え直して対照するだけでなく、第三の参照項に、今日アラブ世界でその学校教育に高い外部評価を得ているヨルダンを据えて、地域文化の変容と関連付けながら近代学校教育制度の意味を比較考察していきたい。

〈報告概要〉

(1) 越水報告「ブルターニュにおける近代教育とブレイス語」

ブルターニュ地方に近代学校教育が普及する過程で、地域言語のブレイス語は、19世紀半ばまではフランス語教育への媒介に用いられていたが、第三共和政下の1880年代以降には学校での使用を禁じられ、20世紀後半までは存続を脅かされる抑圧を被った。しかし、1977年に設立されたディワン会の活動により、今日ではブレイス語教育を行う学校が公教育制度の中に正当に認められている。本報告は、そのような変遷を地域出身の教師たちの活動や意識から辿るように努め、近代教育が地域文化に与えた影響と意義について長いスパンで再考を試みる。

(2) 長谷川報告「戦後沖縄社会の変容と『標準語』指導」

本報告では、昨年度の内容に引き続いて、米国による軍事占領期から「本土」復帰へと至る戦後の沖縄において、教員たちは地域社会の変容と地域住民の意識の変化をどのように捉え、いかなる主体の形成を目指して各地域内の学校において教育実践を行っていったのかについて、「標準語」指導が「本土」との関係において、また、沖縄内部において、いかなる意味をもっていたのかという観点から検討を進める。

(3) 北澤報告「ヨルダンの言語教育とナショナリズム—フスリーの教育思想との比較において—」

S・アル=フスリー(1879-1967)の言語を中心とした世俗的アラブ・ナショナリズムの思想や、アラブ統一を視野に入れた教育思想は、1920年代から1960年代にかけて、アラブ諸国のスタンダードとなった。本報告では、フスリーの思想との対比において、ヨルダンの国民教育におけるアラビア語の役割、世俗主義やアラブ・ナショナリズムに対するヨルダン王制の立場を相対的に位置付け、東アラブの言語教育の一般的潮流とヨルダンのそれとの共通性と特殊性について考察し、沖縄やブルターニュの標準語教育の問題との比較材料を提供したい。

コロキウム

10月10日(日) 15:10～17:30

コロキウム第4 第8会場 14-501教室

学校沿革史と教育史研究 — 高等学校と大学の沿革史を中心に —

オルガナイザー 米田俊彦 (お茶の水女子大学)

報告者 西山 伸 (京都大学大学文書館) :
学校沿革史と教育史研究—大学沿革史を中心に—
米田俊彦 (お茶の水女子大学) :
学校沿革史と教育史研究—高校沿革史を中心に—

多くの学校沿革史が第二次世界大戦前から編纂、刊行されてきた。(財)野間教育研究所には約6,000冊の学校沿革史のコレクションがあり、その資源を活かし、またその資源の性格を明らかにすることを目的に、同研究所の日本教育史研究部門に学校沿革史研究会が2000年10月に設置された(寺崎昌男・山谷幸司・湯川次義会員、京都大学の西山伸氏および筆者により構成)。これまで、高校・大学沿革史を対象に、学校沿革史の特徴、類型、記載事項、編纂体制や学校保存資料について検討を重ね、2008年には『学校沿革史の研究 総説』を刊行した。現在は、引き続き学校沿革史の記述内容の比較検討を進めている。

本コロキウムでは、次の点を中心に研究会のこれまでの研究成果を紹介しつつ、学校沿革史を知ることを通じて、教育史研究をより豊かなものにする方向性を探りたいと考えている。

- ・学校沿革史とは何か。他の社会組織の沿革史とどのように異なるのか。
- ・学校沿革史の刊行の動向や状況。
- ・学校沿革史の編纂体制や学校沿革史の資料。
- ・学校沿革史のスタイルと類型。
- ・大学沿革史と高校沿革史の異同。
- ・研究資料としての学校沿革史(学校沿革史に対する史料批判)。
- ・歴史書としての学校沿革史(先行研究としての学校沿革史)。
- ・学校沿革史の叙述の内容・形式の比較と評価。

コロキウム

10月10日（日） 15:10～17:30

コロキウム第5 第9会場 14－502教室

ライフストーリー分析による教育史研究

オルガナイザー：湯川次義（早稲田大学） 新保教子（早稲田大学） 佐藤隆之（早稲田大学）

報告者・ママトクロヴァ・ニルファル（早稲田大学・院）

・宮崎聖子（九州女子大学）

・佐藤隆之（早稲田大学）

〈設定趣旨〉

近年、ライフストーリー（人生の物語）といったタイトルの本や論文が増え、社会学や文化人類学など、従来の歴史学とは異なる分野から聞き取りを基礎とする歴史研究が数多く生み出されている。

ライフストーリーは、自己論（アイデンティティ論）と密接に関連しているが、それとともに、個人の語りを規定している文化制度としての「語り」を含む概念であり、教育学研究にとっても重要な意味を持つと考えることができる。

ライフストーリーという場合、書籍やメディアの中にも人生についての語りが見られる。たとえば自伝、人生相談は書かれたライフストーリーであり、様々なテーマでの分析が可能である。こうしたデータは従来の公的文書や第1次史料などとは異なるが、教育史研究にとって重要な示唆を与えてくれるものと言えよう。

そのため、本コロキウムにおいては、語りとしてのライフストーリー（口述史）とともに、書籍やメディアに現れた人生についての語りという両面からアプローチし、ライフストーリー分析による教育史研究の可能性について検討する。あわせてデータの有効性や限界を明らかにしていきたい。

報告としては、オルガナイザーからの問題提起の後、ママトクロヴァ・ニルファル氏に、津田梅子の教育理念とその成果という視点から、同窓会誌を基本的データとしての女子英学塾初期卒業生の継続的な進路分析について論じてもらう。宮崎聖子氏には、文献及びインタビュー調査による植民地教育史研究の可能性について検討していただく。さらに、佐藤隆之氏に日記、オーラルヒストリー、伝記、自伝などの資料を用いた進歩主義教育に関する人物研究について、報告をお願いする。